

LIBRARY NOW

公共図書館レポート

映画『ニューヨーク公共図書館』

2019 年夏号

クロスカルチャー出版

CROSSCULTURE PUBLISHING COMPANY (CPC)

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町 2-7-6

☎03-5577-6707 ファクス 03-5577-6708

<http://crosscul.com>



世界的に有名なニューヨーク公共図書館 New York Public Library。三越ではないが二つのライオン像(ライオン像には母体となった Astor アスター図書館と Lenox レノックス図書館に因んだ名称がありまた、恐慌時代に名付けられた patience 忍耐と fortitude 不屈の精神の愛称もある)が出迎えてくれる、あのニューヨークは 5 番街 42 丁目にある威厳のある図書館。その名前の経緯は何度も訪ねたり調べたりして筆者なりに分かっていたつもりでいたが、今回ドキュメンタリー映画を観てその名前をしかと認識した次第。氷解したのだ。名称は public だが中身は private なのだ。それは鉄鋼などで財をなしたカーネギーたちが私財を投じてできた世界屈指の私立図書館だからである。カーネギーは教育、文化や福祉にも力を入れた慈善家としても有名だ(これに匹敵する人が日本では倉敷の実業家・慈善家大原孫三郎か)。筆者が最初に訪ねたのは 1980 年代後半だ。プライベート旅行だったが、当時勤めていた会社の商品を閲覧室のコンピュータを使って検索、その会社の商品の何点かが出てきて興奮したことを昨日のように鮮やかに覚えている。また、マップコレクション室や 2 階(?) にあるチャールズ・ディケンズの展示品等を観て回った。そのあとニューヨーク旅行では時々訪ねている。ニューヨーク公共図書館の建物のまわりには様々な人間模様が見て取れて、これまた興味深い。2013 年春 5 月にはとうとう仕事でお邪魔して館内を案内されたりもした。映画のシーンでお馴染みの大閲覧室も。その時は日本関係の担当者が休暇中でイタリア旅行中、代わりにウェブデザイン担当の女性が応対してくれた。こちらはお近づきの印として日本から箸や和紙などを持参してプレゼントした。日本のラーメンがブームらしく(ここ 2、3 年でラーメンも更に進化したらしくニューヨークのあちこちに店舗ができていくらしい)、話題は豚骨ラーメンの『一風堂』の話で盛り上がった。ラーメンにありつけるまで 2 時間待ちで too crazy と。一緒にお付き合い頂いた某書店ニューヨーク店のキューバ人を伴侶にした千葉県出身の女性スタッフと素晴らしい環境の事務室でしばし会話を楽しんだのだ。それも今となっては懐かしい思い出――。

さて、『ニューヨーク公共図書館』は、NYPL の略で親しまれている、分館や研究図書館を含めて 92 館、予算規模 340 億(日本の公共図書館の数は 3292 館、經常予算 1427 億円―日本の図書館総計 2018 より)、蔵書 5295 万冊、職員 3100 人余、年間来館者数 1700 万人、貸出数 346 万人(ウィキペディア)の巨大かつ民主的な図書館だ。そこにカメラが入った。ドキュメンタリー映画の巨匠フレデリック・ワイズマン監督の『ニューヨーク公共図書館 エクス・リプリス』である。午後 6 時 15 分開始、午後 9 時 50 分に終了の 3 時間 30 分の上映(途中 5 分の休憩)だった。

映画は図書館の科学者とのトークから始まる。やがてこれが民主主義だと言わんばかりの職員たちの熱い議論の場面が展開される。カメラは図書館の内部奥深く潜入していくが、基本はこの職員たちの熱い議論が全編を貫いている。公共図書館といっても中身は私立図書館でニューヨーク市の財政支援と残りは寄付で賄われているのが現状である。そこには財源確保に四苦八苦する図書館側の事情が見え隠れする。何にもまして企画立案がものをいうし、実現に向けて多種多様なプロジェクトを立ち上げ、分館や専門

図書館を含めた巨大な図書館の運営が行政側にまた、寄付者側に対しても現実的に応えられているか、絶えず検証し続け結果を示している。でない予算が削減され図書館運営に支障をきたすからだ。ニューヨーク公共図書館は、恐らく全ての点で世界中のライブラリアンが羨む、舌捲れる筆頭図書館なのだ。

それでは3時間余の上映の中身をパンフレットで追ってみよう。午後の本(Books at Noon)〜リチャード・ドーキンス博士 司書たちの対応 民間支援者に語りかけるマーク館長 ジェローム・パーティー分館 著者と語る〜イスラム教と奴隷性 舞台芸術図書館〜ブルーノ・パーティーワルター講堂のピアノコンサート ブロンクス分館の就職フェア 幹部たちの会議 ピクチャー・コレクション ニューヨークのユダヤ2世について著者のトーク (公共図書館ライブ)〜エルヴィス・コストロ 幹部たちの会議 (午後の本 Books at Noon)〜ユーセフ・コマンヤーカ 中国系住民のためのパソコン講座 点字・録音本図書館 ミッドマンハッタン分館 ブロンクス分館の演奏会 黒人文化研究図書館〜“ブラック・イマジネーション”展 舞台芸術図書館〜マイルズ・ホッジス 幹部たちの会議 読書会 幹部たちの会議 舞台芸術図書館〜劇場の手話通訳者 図書館の内側 パークチェスター分館 ジョージ・ブルース分館 シニアダンス教室 ウェストチェスター・スクエア分館 黒人文化研究図書館〜90周年の祝賀会 読み聞かせ教室〜マクドナルドおじさんの歌 ハーグ・コレクション 幹部たちの会議 印刷コレクション 各分館スタッフとのミーティング 点字・録音本図書館 ジェファーソン・マーケット分館 (公共図書館ライブ)〜パティ・スミス 施設担当の報告 幹部たちの会議 図書館ディナーの準備 委員会への報告〜黒人文化研究図書館の蔵書について 幹部たちの記念撮影 (公共図書館ライブ)〜タナハジ・コーツ 幹部たちの会議 マコース・ブリッジ分館 (公共図書館ライブ)〜エドモンド・デ・ワール 以上が上映内容である。

改めてこの映画から図書館の役割や奉仕(サービス)とは何かというごく当たり前の問いを突きつけられた思いだ。〈知〉の集積場所である図書館は、その本来の姿から進化し続け、高度な調査能力を持つ一現に映画では移民のルーツを訊ねてきた女性に懇切丁寧に応対している光景を映し出していたーライブラリアン、地図コレクションや貴重書(グーテンベルクの聖書や作家カポーティの草稿ほか多数)の所蔵、映画のシーンでも馴染みの大閲覧室(3階、ローズ・メイン・リーディング・ルーム)、オーディオ関係の貸出はもちろんのこと、作家らのトークショー、学習プログラム、音楽やダンス教室の開催そして今やネット接続用のツールまで貸出されている(インターネットのサポートには目を見張るものがある)。言わば、カルチャーセンターやコミュニティセンターとしての役割も担っているのだ。サラダボールのニューヨークの人口800万人のうち11%に相当する90万人が貧困層といわれているが、そういう人たちにも利用できるような工夫されている。身分証があれば原則無料だ。また、それぞれの地域に根差した地域館ともいべき分館の役割はそれを物語っていて、カメラも捉えて離さない。ブロンクスの就職フェア、チャイナタウンでのパソコン指導、黒人文化研究図書館の作家を招聘してのトークショー、舞台芸術図書館でのピアノ演奏、点字・録音本図書館の勇氣ある試みなどカメラは執拗に本質を抉るように追う。筆者は特に作家らのトークショーや黒人文化研究図書館それに職員幹部たちの会議のシーンが印象に残った。シビアな論戦のシーンも、この図書館を利用して作家や芸術家になった人たちもいるのも頷ける。知的好奇心を求める人たちには大いに解放されているのだ。1980年代後半にここを訪ねた際に分館も2、3訪ねている。それは寒いニューヨーク歩きに一休みできる安全な場所としてだったか、或いはある明治期に発行された新聞をあてもなく探していた時期だったか、今となっては定かではない。が、その新聞のありかをニューヨーク公共図書館で再チャレンジして探してみようと考えている。デジタル化が進んだ今、発見できるかも。それはともかくあつという間の3時間、迫力があつたしニューヨーク公共図書館の内部を垣間観れて大変興味深かった。昨夏北欧の公共図書館・大学図書館を訪ねた筆者なりの“リアルな図書館”の旅に新たな映画芸術の所産が加わった格好だ。何よりもここには生き生きとした人間が描かれている。リアリズム映画の極致と言ってもいい。平等と民主主義そして人間参加・讃歌――。

【編集後記】

公共図書館向け新しい切り口の小冊子、「LIBRARY NOW」第2号をお届けします。ドキュメンタリー映画『ニューヨーク図書館 エクス・リブリス』を観ました。普段は公共図書館の内部を伺い知ることはできないのですが、この映画はライブリアンが主役になって魅せてくれました。ともかく世界有数の図書館(私立図書館!)には民主主義と平等が息づいています。利用者に奉仕(サービス)すべくライブリアンの活動が生き生きと描写されています。(k)

LIBRARY NOW 第2号

2019年6月15日発行

編集——(有)クロスカルチャー出版

LIBRARY NOW 編集委員会

〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-7-6

電話 03-5577-6707 ファクス 03-5577-6708

<http://crosscul.com>